

Pre-News Letter No.8

18年 7月4日(火) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:mihosma@chikyu.ac.jp

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



加茂なす、

<http://www.e-kyoto.net/aji/natu01c.htm>

『ヨルダンの花見旅行』

丹野 研一 (総合地球環境学研究所)

ヨルダンの花見旅行

総合地球環境学研究所 丹野 研一

2006年3月と6月の2回、ヨルダンを旅した。目的はずばり「お花見」。私は西アジアの遺跡から発掘される植物を研究している。そこで植物のお勉強のために、花咲く春のヨルダンを歩くことにした。こんなお花見の旅をして「仕事だ」といえる考古植物学という職業に、私はとても満足している。



<ヨルダンの草原>

ヨルダンに着いた。エジプトほどではないが、隣国シリアよりも英語を話す人が多かった。ヨルダンはさすが観光立国というだけあって、外国人がひとりで歩いてもうるさく言われずに、放っておいてくれる。この点は秘密警察がさかんなシリアやトルコとはおおいに異なる。そしてぼったくりタクシーが、あまりいない。おかげでヨルダンで

の調査は、今までになく快調に進んだ。ただし田舎では、子供たちが楽しげに投石してくるので、少々注意が必要だった。

まずはスーク（市場）を見た。ビターベッチという珍しいマメに出くわした。このマメは、新石器時代（BC9000～BC5500頃）によく利用されていたが、その後はすたれてしまい、いまでは飼料用か救荒作物として細々と栽培されているものだ。聞くとやはり、鳥の餌だという答えが返ってきた。コクゾウムシがわんさか入っているので、この店のビターベッチは鳥にとってはなるほどご馳走だ。

農村に出た。シクラメンやアイリス、アネモネなど、日本では高価な花の原種がたくさん咲いていた。ふと羊飼いが現れ、ラチルスというマメ科植物の莖葉を摘んで「これは食べられる」と教えてくれた。今回はとくにマメ類を知りたかったので、これはちょうどよかった。

考古遺跡から出土するマメは、わりと多いが、同定はとても難しい。それも



そのはずで西アジアはマメ類の宝庫、*Astragalus* 属だけでも 800 種もあるという。それにマメ科植物には有毒なものが多い。だから分類研究だけでなく、どのように利用されているのかもたいへん興味深い。ラチルスもまずまずの有毒なマメで、栽培種のガラスマメ (*Lathyrus sativus*) でさえ、毎日乾燥豆 200 g 以上を摂取すると下半身不随

<ラチルス>

になってしまう。

さて、生えていたラチルスの茎葉を食べてみたところ、意外にうまかった。

日本の山菜でいうところの‘キド味’を思わせるようなある種の旨みに加え、わずかにナッツのような香ばしさがあつた。そういえば生葉がよく食用されるマメは、ほかにも香辛料でよく使われるフェヌグリークがある。ともかく茎葉なら毒は問題にならないだろう。



<フェヌグリーク>

西アジアは世界で最も古くから、農耕がはじまった地域だといわれている。初期農耕時代の人々は、どのような環境のもとに、どのように暮らしていたのだろうか。私がやっている「考古植物学」とは、遺跡を発掘してでてきた種子や木材などについて、種類を同定し、その植物がどのように利用されていたのか、また農作物の進化がどのように進んだのかなどを明らかにしようとする学問である。当時の生活がどのようなものだったかを復元し、植物利用の歴史を明らかにするために、このような基礎的な現地調査が役に立つと思われる。